

2026.10.04.

「エルサレム入城」

旧約 ゼカリヤ書 9章9～10節

新約 ヨハネによる福音書 12章9～19節

1. はじめに

月・火と東京に出張しまして、そこでインフルエンザに感染したようで、金曜日には9度の高熱が出ましたが、今朝は平熱に戻っています。しかし、インフルエンザですので、皆さんの顔が見えないところから、み言葉を語ります。聖餐は来週に延期します。オルガニストの方もご主人がインフルエンザにかかれたということで、急遽お休みになりました。このような礼拝の形はわたしも初めてですが、聖書を開いて、共にみ言葉を受けてまいりましょう。

ヨハネによる福音書を共に読み進めてまいりまして、今日はイエス様がエルサレムに入城された場面です。11章においてラザロの復活という出来事がありまして、これが大変な評判になりました。メシア、キリストの到来を待ち望んでいた人々にしてみれば、「遂に来られた。この方こそメシア、キリストだ」という思いを抱いただろうということは想像できます。しかし、神殿を中心とする指導者たち、祭司長といった人々にとりまして、これはとても危険なことに思えました。もし、人々がイエス様をメシア、キリストだとして担ぎあげて、反ローマ運動、更にはローマに対しての暴動・反乱などになるものならば、ローマによって曲がりなりにも自治を認められ、エルサレム神殿を中心とした秩序あるユダヤ民族の存在そのものが危うくなってしまう。ローマは税金を納めている分には、それぞれの民族の宗教も習慣も認めるというありかたで統治をしておりました。ローマに支配されるというのは、経済や安全保障という面ではとてもメリットがありました。広大なローマ帝国が経済圏となるわけですし、最強のローマ兵が守ってくれる。しかもそれぞれの民族の伝統には口を出さず、自治を認める。エルサレム神殿を中心とした指導者層、こちらは主にサドカイ派ですが、彼らはこの状態を維持したいと願っていました。そのような彼らにとって、反ローマ運動、まして暴動や反乱などもっての外でした。何故なら、ローマは反乱だけは決して許さず、完膚なきまでにたたき、二度と立ち上がれないようにすることを知っていたからです。ですから、彼らはイエス様を殺すとともに、ラザロまで殺すことにしたのです。イエス様に復活させられたラザロがいなくなれば、イエス様がラザロを復活させたということも忘れられていくだろう。そのように考えたのでしょう。

このように見てきますと、イエス様のエルサレム入城という出来事は、イエス様を亡き者にしようとする人たち、これは祭司長や大祭司などユダヤ教の指導層ですが、それとイエス様をメシア、

キリストと信じる人々これは民衆といってよいでしょう。この二つの勢力が一触即発の状態になっている中で為されたということが分かります。

2. エルサレム入城

さて、9 節以下の記事対しての小見出しは「エルサレムに迎えらる」となっています。確かにイエス様はこの時、人々に迎えられました。しかし、キリストの教会はこの場面を「エルサレム入城」と言ってきました。それには明確な意図がありました。そもそも「城に入る」と書く「入城」という言葉は、めったに使われる言葉ではありませんし、誰にでも使われるものではありません。私はお城を見るのが大好きで、今年の夏には大分県のいろんなお城に行きました。「荒城の月」のモデルとなった竹田市の岡城にも行きましたけれど、この時小堀は岡城に「入城した」とは言いません。城に入ると書く「入城」は日本語の辞典によれば「戦いに勝って敵の城に乗り込むこと」を意味します。軍勢が入城する場合はこれに当たるでしょうが、イエス様が単独でこの言葉を用いられるということは「イエス様はエルサレムの王として入られた」ということを意味します。つまり、このエルサレム入城から始まる受難週の出来事は、イエス様の王としての歩みとして受け取るべきことだということを告げているのです。そして、そこで起きたことは、旧約に預言されていたことだったということです。

3. 歓迎される

イエス様がエルサレムに来られと聞き、大勢の群衆が「**なつめやしの枝を持って迎えに出た。**」とあります。イエス様がベタニアのマルタとマリアとラザロの家に前の日に行っていたわけですが、この群衆はそこにも来ていた人たち、あるいはそのことを聞いていた人たちだったでしょう。彼らはベタニアまでイエス様に会いにというよりも、ラザロに会いに行きました。本当にイエス様はラザロを死んでいたのに生き返らせたことを確認し、そしていよいよイエス様こそメシア、キリストであるという確信を得たことでしょう。17.18 節に「**12:17 イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中からよみがえらせたとき一緒にいた群衆は、その証しをしていた。 12:18 群衆がイエスを出迎えたのも、イエスがこのようなしるしをなさったと聞いていたからである。**」とある通りです。エルサレムにはいくつかの門がありますが、ベタニアから来られるのだから、イエス様が来られるならこの門からだと群衆はわかっていたのでしょう。ですから、彼らは「ナツメヤシの枝」を持って、イエス様を歓迎するために待っていた。この時イエス様を迎え入れた人々とは、そのようにイエス様をメシア、キリストと信じていた人たち、そう言って良いだろうと思います。もっとも、イエス様をメシアとして信じ受け入れるということと、イエス様によって与えられる救いに与るとい

う事の間には、しばしばズレが生じます。つまり、イエス様は自分が求めている「救い」を与えられるメシア、キリストだと信じる。しかし、イエス様与えられる「救い」とは、その人が考えていたようなものではないということが起きるわけです。この時もそうでした。このことについては、また後で触れましょう。

この時、群衆が口々に叫んだこれでした。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、／イスラエルの王に。」これは詩編 118 編の言葉です。しかし、最後の「イスラエルの王に」は詩編 118 編にはありません。これはまさに群衆がイエス様をエルサレムの王として迎えたということを意味しています。イスラエルの王というのは、幾つもの意味合いを持つ言葉です。「真のイスラエルの王」という意味ならば神様だけということになります。また、イスラエルという国家があればイスラエル国家の王ということになります。しかし、イスラエル国家はこの時存在していないのですから、ローマ帝国の支配から脱却しイスラエル国家を建てる方という意味にもなります。多分、人々は三番目の意味「ローマ帝国の支配から脱却しイスラエル国家を建てる方」としてイエス様を迎えいたのでしょう。

そのことは、彼らが「ナツメヤシの枝」をもって迎えたことにも表れています。みちに、この「ナツメヤシ」は口語訳では「棕櫚」と訳されておりました。ですから、受難週の始まる主の日を「棕櫚の主日」と言うわけです。では、なぜナツメヤシの枝をもってイエス様を迎えたのか。このことは、10 章 22 節の神殿奉献記念祭を説明した時にも申し上げましたが、この祭りは、ハヌカと呼ばれる祭りで、現在の暦に変換しますと毎年移動しますが 11 月～12 月に行われるものでした。この祭りは、主イエスの時代より 200 年ほど前の出来事を記念して守られていた祭りです。その出来事というのは、その頃ユダヤを支配していたのはセレウコス朝シリアという国でした。この国はアレキサンダー大王の東方遠征によって生まれた巨大な帝国がアレキサンダー大王の死後、すぐに部下たちによって分割されます。これも何十年にも及ぶ戦争が繰り返された結果、ユダヤを支配したのがセレウコス朝シリアだったわけです。時にこのシリアの王であったアンティオコス 4 世 エピファネスが、ユダヤ人たちにギリシャの宗教を強要し、エルサレムの神殿にギリシャの神々の像を置。そしてユダヤ人たちに拝ませたわけです。更に、割礼をも禁じました。これに対して、ユダヤ人たちは激しく抵抗し、多くの命が失われました。そして何年かの戦いの後、紀元前 164 年にエルサレム神殿にあったギリシャの神々の像を取り除き、再び主なる神様を礼拝出来るようになりました。このことを記念した祭りがこれです。神殿から偶像を一掃しましたので口語訳では「宮きよめの祭り」と訳し、新共同訳では再び神殿を主なる神様に捧げたので「神殿奉献記念祭」と呼ばれるわけです。この祭りはヘブライ語ではハヌカです。この戦いを指導したのはユダ・マカベアという人でした。そして、毎年この祭りで用いられたのがナツメヤシの枝だったわけです。

このように見てきますと、イエス様を迎えだ群衆のイエス様への期待と思いというものがはっきりするのではないのでしょうか。

4. ロバの子に乗って

では、そのような群衆の思いの中で迎えられたイエス様はどうだったのでしょうか？ 14 節「**イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。**」わたしはこの場面がとても好きなのです。もし群衆の思いや期待に答えようとするならば、「子ろば」は無いですよね。偉大な王が乗るのは馬です。どこの銅像も馬に乗って剣を抜いています。しかし、イエス様は子ろばに乗られました。全く威風堂々としていません。子ろばですから足が地面につきそうなくらいです。いっそ何にも乗られなくて良かったのではないかと思うほどです。しかし、エルサレム入城という決定的な場面で、イエス様が乗られたのは子ろばでした。それは、イエス様は群衆の思いに応えようとしたのではなく、ただ預言の通りにしようとしたからです。ご自分がエルサレムに入ることも、これからエルサレムで起きることも、全ては神様のご計画の中でのことであることを受け止めておられたからです。そして、神様のご計画の通りであるならば、それは既に預言されていたことであるに違いないからです。子ろばに乗ったのもそのためでした。14.15 節に「**12:14 イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりのことである。 12:15 「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、／ろばの子に乗って。」**と記されている通りです。これは先ほどお読みしましたゼカリア書 9:9 の言葉ですが、10 節にはそのことの意味も記されています。「**9:10 わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。**」つまり、子ろばに乗ってイエス様がエルサレムに入城されるのは、戦車や軍馬や弓を絶ち、平和をもたらすためであると告げられています。しかもその平和は、ユダヤの平和というような小さな平和ではなく、全ての民に及ぶ平和、それを与えるためにイエス様は来られたのだということを示していたわけです。

5. 神の思いと群衆の期待のずれ

しかし、この時、イエス様が子ろばに乗られたことが、旧約に預言されていた平和を与える真のメシア、キリストの到来を示すものであることを知る者はおりませんでした。16 節には「**弟子たちは最初これらのことが分からなかった**」と記されている通りです。弟子たちにしてみれば、どうして子ろばに乗るのかな？よく分からなかったのでしょうか。しかし、後になってイエス様が子ろばに乗られた意味を知ります。それはいつでしょうか？聖書はハッキリ記しています。16 節「**弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについ**

て書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。」つまり、イエス様が十字架にお架かりになり、復活されて弟子たちにその御姿を表わすまで分からなかった。逆に言えば、復活のイエス様に出会って、全てが明らかになったという事です。

では群衆たちはどうだったかと言えば、自分たちをローマの支配から解放してくれる民族的英雄としてのメシア、キリストのイメージをイエス様に投影し、期待していました。しかし、イエス様が預言されている通りに、平和の王として歩むということは、その先には十字架と復活が待っているわけです。イエス様はそのことを承知の上でエルサレムに上ってこられたわけです。遂に時が来た。という事ではなかったかと思います。しかし、ナツメヤシの枝をもって「**ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、／イスラエルの王に。**」と叫ぶ群衆たちの期待と、イエス様の思いにはこのエルサレム入城の段階からずれがあったたということです。そして、このずれがイエス様への失望、また期待を裏切られたという落胆と重なり、やがてイエス様が捕えられ、総督ピラトの前に連れてこられた時の「十字架につけよ」との叫びへとつながっていったのでしょう。

神様が、イエス様が私どもに与えようとしてくださってる救いとは、「罪の赦し、体の蘇り、永遠の命」を与えて下ることです。しかし、勿論それだけではありません。それは究極の救いです。しかしこの地上にあっても、神様の御心を求めて歩もうとする志が与えられ、祈ることを知り、新しい命に生きる者とされます。日常の些細なことの中にも、神様の憐みを覚えることが出来ますし、祈りが聞かれることを知ります。先日、オルガニストのKさんが具合が悪いということで休まれました。その時、みんなKさんのためにお祈りしました。Kさんは高齢ですから、このままオルガンが弾けなくなってしまうのではないかという不安もありました。幸い、二週間ほどで無事戻られたのですけれど、その時ある方が「先生、本当に良かった。神様は祈りを聞かれるんですね。祈っていなかったら、神様が私たちの群れをこんなに愛してくれている事もわかりませんでした。」と言われました。その通りなのです。祈っていない人にとっては、ただ無事に戻られてよかった。それだけです。しかし、祈っていた者にとっては「祈りが聞かれた」となります。これは雲泥素の差でしょう。私共のはそういう世界に生きる者とされているんです。

しかし、この時群衆がイエス様に期待したもの、ローマの支配から自由になり、更にローマに代わって世界を支配するといった野望がかなえられることはありませんでした。それはいつでも同じです。「自分の願いを叶えるために神様がいる」わけではないからです。このような神様とのかかわり方は、典型的な偶像礼拝です。神様のみ心を為すために私共は造られたのです。これを取り違えてはいけません。

6. 何をしても無駄だ

イエス様が、群衆に「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、／イスラエルの王に。」と歓喜の声をもって、ナツメヤシの枝が振られる中を、子ろばに乗ってエルサレムの町に入ってくる姿を、どのような思いでファリサイ派の人たちはこれを見ていたのでしょうか？聖書ははっきり告げています。「ファリサイ派の人々は互いに言った。「見よ、何をしても無駄だ。世をあげてあの男について行ったではないか。」」これは、放っておくしかないという意味ではありません。もう、議論してイエスをやりこめるなんてことではどうにもならないと思ったということです。とすれば、そのあとに残されるているのは、イエス様を亡き者にする、それしかないということになったということです。このイエス様のエルサレム入城の時から、十字架への道は決まってしまったということです。

7. 誤解と反感の中でも

私共も神様のみ心が分からず、自分が期待したような結果が与えられないことは良くあります。神様の愛、神様の守りと支えが分からなくなる、そういうことだってあります。しかし、たとえそういうことがあったとしても、イエス様が来られたのですから、どのように神様が道を開いていくのか分かりませんが、必ず御心は成就されていきます。ですから「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、／イスラエルの王に。」と叫び歌ってよいのです。神様は人間の誤解や反感のものともせず、それらを用いてさえも御心を実現されて行かれるからです。私共はその大いなる神様の救いの御手の中にあることを覚え、それでもなお、どんな時でも、主をほめたたえつつ歩んで行く者でありたいと思います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、主イエス・キリストの父なる全能の神様。

今朝、あなた様はイエス様のエルサレム入城の場面のみ言葉から、イエス様の御心を知らない群衆、いよいよイエス様を亡き者にしようとする者の中にあって、敢然と神様のみ心に従われるイエス様の姿を見ました。私共も神様の御心が分からずに、右往左往し、神様の愛を信じられないようなときさえあります。しかし、神様は私どもの思いを超えて、御心を成し遂げられて行かれます。そのことを信頼して、どんな時でも、あなた様を愛し、信頼し、お従いしていく者であらしめてください。聖霊なる神様が私どもの弱い信仰を強めてくださいますよう、心から祈ります。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン